

# 「居心地の良いクラス」をウェルビーイングの視点から探索する

目時 修 (Osamu METOKI)

城西国際大学経営情報学部

## 1. ウェルビーイングの視点から「居心地の良いクラス」を考える

筆者は「教科学力」について社会生活を営む上での「手段」の一つにすぎないと考えている。しかし、学校（教師）は無意識的に「学力」の伸長が“目的”になり、学力向上（保障）に向けた考えに偏重しているように映る。そして、この偏重は学習に“つまずき”や障害や貧困などの困難を抱えているマイノリティを排除し、学びの不平等を招いているように思えてならない。本発表はこの偏重による学びの不平等の軽減のため、「学力」に代わる新たな指標を見出すため、筆者が学びを下支えすると考えている「居心地の良いクラス」についてウェルビーイング(Well Being)の視点から探索する。

Well Being の日本語訳は「幸せ」や「幸福感」と訳されることが多く、WHO によれば、「健康とは身体的、心理的、社会的安寧状態であり、単に疾患や障害がないことを意味するものではない」と定義される<sup>(1)</sup>。また、ユニセフは Well Being を「物質的豊かさ」「健康と安全」「教育」「日常生活上のリスク」「住居と環境」の5項目の社会福祉の観点から捉えて国際調査を実施している<sup>(2)</sup>。

欧米の教育効果研究においては、旧来の認知的な学力に代わる非認知的学力の重要性が指摘され、教育効果を測定する新たな指標として Well Being が取り上げられ、Samdal は「友人や先生のサポートが主観的な Well Being の構成要素であることを示し、Knuver&Brandsam は学校の雰囲気、教師・クラスメイトとの関係が Well Being に影響を与えていることを示し、Konu et.al は Well Being に対する影響要因を個人的要因と学校の特徴という集団的要因にわけ、いじめなどがなく、教師からの支援が受けやすい学校に在籍していることが、子どもの Well Being を高める要因であることを示している<sup>(2)</sup>。

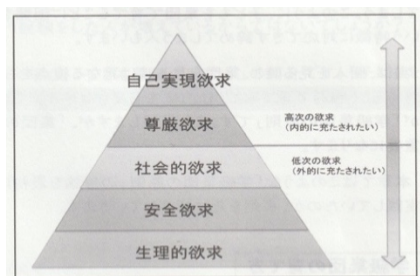
筆者は Well Being を高めるには、子どもが自分自身で孤独な状態でできるはずがなく、とりわけ、子どもの場合は「親との関係」、「先生との関係」、「友だちとの関係」など、いろいろな「関係性（つながり）」の中でこそ子どもが育つと考えている。

## 2. つながりという“安心感”

“安心感”は自分にも集団にも身体的、精神的、社会的な良好な状態を創ることから、「集団にプラスに働きかける個人の成長」と「集団の成長」との2つの側面から“安心感”についてみていく<sup>(3)</sup>。

はじめに、「個人の成長」についてはマズロー (Maslow) の五段階欲求説を援用する<sup>(4)</sup>。

- ・第一欲求「生理的欲求」－学校システムの整備
- ・第二欲求「安全欲求」－なんでも言い合える・信頼・安心
- ・第三欲求「社会的欲求」－居心地の良い・他者との交流の場
- ・第四欲求「尊厳欲求」－お互いが認め合える・自分に自信がある
- ・第五欲求「自己実現欲求」－挑戦する・他者を支える



出典：前田智行(2019)p.6

次に「集団の成長」について河村茂雄は「自治的集団 (=子どもたちだけで成長できる集団)」と主張する学級経営の3つの視点で考える<sup>(5)</sup>。

- ①ルーティン行動が多い：「いつ・どこで・何を」するという役割分担が明確でルールが共有されている
- ②関係性を構築する：「先生と子どもの信頼関係」があり、子ども同士でお互いに良いところを真似る関係性があり、「授業が楽しい・わかる」ことで自己肯定感の向上と「安全な学級生活」の実現ができる。
- ③自己開示と他者貢献ができる：「自分考えやプライベートなこと」を友達に語ることができ、他者への援助などにより、「話す・書く」という伝える力（言語化による表現）という自己開示ができる。

### 3. 非認知的能力を高めることでウェルビーイングが高まる

「性格の強み」と呼ばれる粘り強さや誠実さ、自制心などの「非認知的能力」<sup>※1</sup>の強さは、子どもたちが未知の課題や困難を乗り越えて、格差や社会的不安定さが拡大する社会を生き抜き、成功させる役割を果たす<sup>(6)</sup>。この非認知的能力をポール・タフのように「気質」と捉えるならば、非認知的能力は数学や理科、歴史などを理解する認知的能力と種類が異なり、訓練や練習の結果として身につくものでなく、非認知能力を伸ばすプロセスが、読み書き計算などの認知能力を習得するプロセスと異なる<sup>(6)</sup>。このように、非認知能力は教科の「教える身につくスキル」ではなく、「子どもの所属する環境」により大きく左右される「気質」なのであろう。

シカゴ学校研究協会のカミーユ・ファリントンと研究チームは、生徒のグリット（やり抜く力）や粘り強さに直接働きかけることが、成績向上に効果的な手段になるというエビデンスはほとんどないが、学校や教室の状況がポジティブなものの方や効果的な学習を助長すれば、すべての生徒が粘り強さを見せるようになると述べている<sup>(6)</sup>。この生徒のグリット（やり抜く力）や粘り強さは、筆者の経験上、その時の子どもの状況（所属する環境）に大きく左右される。例えば、1年生で頑張ってもやり通したが、3年生ではやり通せない、社会科は頑張っても、英語は寝ていて、さらには曜日によって、月によって違う。このように課題にアクセスしようとする子どもの意思に左右される。

非認知的能力は中学生や高校生でも、主に彼らの属する学校を中心とした環境の産物で、子どもたちの粘り強さや誠実さ、自制心などを高めたいと思うなら、最初に働きかけるべき場所は子ども自身ではなく環境なのである<sup>(6)</sup>。だからこそ、「居心地の良いクラス」を創ることで、Well Beingが高まり、結果的に子どもの非認知的能力を高めることになるのである。

### 4. まとめ

カミーユ・ファリントンは、「私はこの学校に所属している」、「私の能力は努力によって伸びる」、「私はこれを成功させることができる」、「この勉強は私にとって価値がある」などの信念が、教室での子どもたちの頑張りに大きく貢献すると述べる<sup>(6)</sup>。生徒のグリット（やり抜く力）や粘り強さの背後にある「マインドセット（心のありよう）」は、子どもたちのそれぞれの姿勢と自己肯定感、そして子どもが所属する所属する集団の居心地の良さに働きかけ、Well Beingを高めることにつながり、主体的に課題に向かおうとする非認知的能力の発達が期待できる。このように、子どもはカミーユ・ファリントンの4つの信念を持っている（持ち続ける）ことで、出会った課題へ挑戦、仮に失敗してもそれを乗り越えるためにマインドセットがポジティブになり、Well Beingを高めることになり、結果的に「居心地の良いクラス」づくりに貢献することになる。このように「居心地の良いクラス」とは、子どもたちの日常からの心理状況に影響を与え、学校でおこなう学習活動にも影響を与え、子どもたちの非認知的能力を高め、それが認知的能力を伸ばすための道具箱（手段）となるといえよう。

<註>

※1 ポール・タフ(2019)の文中では「非認知スキル」・「非認知能力」であるが、本発表では「非認知的能力」に統一して用いる。

<参考文献>

- (1)松本真理子(2017)「日本とフィンランドにおける子どものウェルビーイングへの多面的アプローチー子どもの幸福を考える」明石書店
- (2)西徳宏(2018)「日本の教育効果研究の再検討：ウェルビーイングの視点による探索的研究」大阪大学未来共生学, 5, pp.141-170
- (3)前田智行(2019)『『いじめのない学級』と『わかる授業』を創る指導の理論と実践』教育報道出版社
- (4)A.H.マズロー(1987)「人間性の心理学ーモチベーションとパーソナリティ」(小口忠彦訳)産能大出版部
- (5)河村茂雄(2010)「日本の学級経営ー集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望」図書文化社
- (6)ポール・タフ(2019)「私たちは子どもに何ができるのかー非認知能力を育み、格差に挑む」(高山真由美訳)英治出版